

占領と肉体の密会

——「肉体の門」が物語る戦後——

黄 益 九

一 肉体の時代

敗戦直後の文化空間を磁場として登場するキーコンセプトといえば、「肉体」をモチーフとする時代点描であろう。このような時代点描を、たとえば丸山真男はエッセー「肉体文学から肉体政治まで」¹⁾のなかで、敗戦直後の荒廃した「近代社会」が再構築されていく過程のうちにゆがみと捉え、そのゆがみを近代社会の組織的分化から生じた病理現象と認識し、そのゆがみが「社会の肉体」と絡みあつて広く根を張っていると主張する。この言説は戦後の国家・社会の再建途上に生じる病理現象を「肉体」の比喩でとらえたものである。また鹿野政直は、戦中と（敗）戦後を区分する指標として、戦中を国民の「体力」を消耗しつくすかたちを取っていた「体力」の時代²⁾、（敗）戦後を食糧不足や病原菌の蔓延による「肉体」を脅かす危機の時代としての「肉体」の時代²⁾であったとする。医学的な立場から敗戦後の時代状況を捉えている点で代表的な知識人の言説といふことができる。そればかりではなく、当時の文学界でもこの肉体言説は様々な痕跡を残している。たとえば武田泰淳の「限界状況における人間」（一九五八年）の一節は

戦後、「肉体文学」なるものが、さかんに書かれ、さかんに読まれた一時期があつた。性を抑圧されていた戦争中の反動として、性の解放がむやみに叫ばれた。肉体の裸の美しさと強さが、大げさにたたえられた。

といっている。この言説は戦後の文学のありようを肯定的に捉えているわけではないが、たしかに肉体ということが時代の文学を規定する大きな喩としての役割を担っていたのである。

もちろん、それぞれ違う立場から、その時代を捉えていることは事実で、「肉体」は政治・医学においては社会のゆがみの喩であるが、文学においては具体であった。その差異はともかく、少なくとも、戦後の社会文化空間を表象するモチーフとして「肉体」が浮上していることに注目すべきである。当時の文学領域は荒廃から一挙に国家・社会・文化の再建に向かわねばならない時代の激動の嵐の只中でもまれていたことはいままでもない。政治・医学の領域における「知」の代表の言説にみられるような戦後社会の主潮がいわゆる「肉体文学」という潮流を産みだし、その傾向が流行していったと考えられる。したがって戦後文学を語る研究者の多くがこの「肉体文学」の形成の問題を追究し、それに対してほぼ異口同音に唱えているのが次のような言説である。

極度の精神主義によって抑圧されていた「肉体」の解放であったといえないだろうか。昭和文学が、芸術派にしてもプロレタリア文学にしても、観念的な「自意識」からの脱却や肉体を犠牲にしての精神主義を極限までに追求して袋小路につきあたってしまったとき、精神の極限概念としての「肉体」があらわれたのである。

戦時体制下のなかでその国策イデオロギーによって精神あるいは観念の問題が肉体の抑圧と犠牲をあまりにも強く要求しすぎていた。しかし敗戦の結果、そのようなイデオロギーが破綻した。そのため極限まで抑圧と犠牲にさらされていた肉体が解放された。その反動の発露として形成されたのが「肉体文学」であると記されている。興味深いのは、この言説の枠組みが精神と肉体との両極ともいえる二項対立の図式にあることである。前述したとおり、戦後社会の「知」においてこのような認識の枠組みがなかったとはいいたい。ただこのようなきわめて単純な見解だけでは、とうてい戦後「肉体文学」の形成を捉えきれないと考えられる。戦後の文化空間はもっとさまざまな「力」の衝突や「知」の矛盾などにおびやかされたはずである。そういう意味で、前田愛の次のような指摘は示唆的である。

焦土の都会によみがえった自然のあららしい活力にうながされて誕生した肉体の神話のかたちを正確に描きだすこ

とはいっそうむずかしいかもしれない。現在では記憶の片隅に追いやられてしまった世相や風俗の断片が、戦後の一時期には、じつはひとつの時代がひらかれる創世記のかがやきを放っていたのだ。⁽⁵⁾

前田愛は敗戦直後の「肉体」なるものが保っている喩の多義性あるいは難解性に言及しながら、その理解には同時代的視座が必要だといっているといえる。だとすると、戦後「肉体文学」を語る際に、単なる「精神」に対する反動作用という単純な二項対立、つまり精神と肉体を対峙させる見方には大きな欠落があり、したがって、より時代に即した複雑な解釈を求める必要が生じるのである。

本論はこのような立場から「肉体文学」の代表作とも評価されている田村泰次郎の「肉体の門」をとりあげ、戦後社会の「精神」と「肉体」の関係を再考することを目的として論述していこうと思う。

「肉体の門」は、昭和二年（一九四七年）、講談社から文芸雑誌『群像』三月号の「創作」欄に発表されて以来、合計七〇万部以上の単行本の売り上げを記録するベストセラーとなった。そのためにこの作品は戯曲化され、地方巡回上演をふくむ一千回以上の上演記録をかぞえたとされる。戦中の「日本がまだ負けないとき、軍需工場のなかで汗と機械油にまみれてゐ」た女性たちが敗戦後、焼け跡の街道で自分の肉体を元手に生きていく街娼たちとなった。この小説はそんな彼女たちを主役として登場させる物語である。

発表同年の『群像』五月号に載せられている、青野季吉、伊藤整、中野好夫の三人による創作合評会には、坂口安吾の「二十七歳」と比較しながら、「あれだけの作品でエロチシズムもなければ、デカダニズムもない。そういうような、エロチシズムとか、デカダニズムというような言葉を僕らに想わせるようなものがない。そこに妙な人間的な面白さを感じてゐる」という評価が提示されている。まさに「妙な」評価といえよう。しかし従来の「肉体の門」の評価が「風俗性」を際立たせているのにくらべれば画期的といえる。風俗批評としては、たとえば、川嶋至は「そこに展開される風俗絵巻は現象的にまさに戦後の現実」であると指摘しながら「肉体の門」が田村の文名をひととき高めたのは、こうした風俗を肯定的に描出したことによるところが大きい」と論じている。たしかに、「肉体の門」に「風俗性」がないとはいえない。

しかし同時代の感覚はそれを否定している。つまりその評価は、後に形成されてきた田村泰次郎の風俗作家イメージに

よって週及的に屈折した評価であると言える。その一方、近年では田村泰次郎と坂口安吾の「肉体」の差異を比較する研究も見られるようになる。山本幸正の「〈肉体〉と〈孤独〉——肉体文学と坂口安吾——」には、田村泰次郎と坂口安吾の「肉体」の意味を比較しながら「肉体の門」においては、快楽の欠如した〈肉体〉が、「男」によって目覚めさせられ、快楽を知る完全なる〈肉体〉へと変貌した」と語り、田村泰次郎の「肉体」を「男性／女性という権力関係を補強してしまう」「肉体」と規定している。もちろん、テクニストの内部のジェンダー・アイデンティティから考えると、「肉体」に媒介される男女の権力構造がうかがえることはたしかだ。しかしその男女関係を検討することで田村泰次郎の「肉体」の意味を一義的に断定するには無理がある。なぜならテクニストには占領期の政治制度と「肉体」とをアナロジーととらえる異常な喩の關係が刻み込まれているからである。

そこで本論は、田村泰次郎の「肉体」のモチーフが占領期の支配イデオロギーと、文化伝統の連続／断絶を担う作家自身の〈知〉とのせめぎ合いの中でどのような意味作用を構築していくのかを考察しようとする。その作業によって「肉体」に託している占領期知識人のまなざしを探っていくことが課題となる。そしてそのうえに立つて「肉体の門」の戦後占領期文学としての新しい位置づけを模索する方向に進んで行きたい。

二 「掟」に見る「肉体」のありよう

一種の出生の秘密を抱えている彼女たちはパンパンと呼ばれる、占領軍相手の売春婦であった。彼女たちは戦後占領期の社会にあっても疎外される存在であるがゆえに彼女たち自身の集団を作って社会からの孤独に対抗しようとしていた。そのために今度は逆にその集団において互いの連帯と団結を強化するための「掟」が存在するようになる。その一つは外部に対するもので、「自由を確保するための掟である。原始人のタブウのやうな、あるひは獣の世界にある「群」の意識のやうな、自衛と、生存のための連帯の秩序である」と記されている。この掟は、物語の前半部「関東小政」と呼ばれる女性の刺青の話の文脈のなかで次の二つの目的を表わしている。

原始人が虎や、豹や、熊と闘ふには、人間以上の能力をそなへたなにかに化けなければならないのと同じやう

に、せんのその日その日が闘ひである生き方には、自分よりもつと強い、遅しい神秘な力を本能的に欲しがった。自分たちの縄張りを荒らす、山の手あたりのお嬢さん面したパンパン娘を、路地にひきずりこんで、ぱつと左の腕をまくりあげ、「関東小政」の四字が月の光か、ネオンのあかりに映えるのを眼にしたときの、相手の毒気を抜かれた表情を想像すると、闘志で胸もとがうづくのだ。(二九—三〇頁)

この刺青という行為はまさに彼女なりの心理的装置であり、「肉体」に刺青を刻み込むことで掟の目的がより一層強められていく効果をもっている。小政の刺青行為は、現実の自己の弱さをのりこえようとする心理から生まれたもので、その意味からすると、自己防衛の本能に準ずる行為である。しかし、小政の刺青が仕上がった時の様子を見てみると、

今日は、せんの刺青が仕あがつたので、彼女は心が浮き浮きしてゐた。濡れタオルを左腕にまいて、針痕の脹れをひやしてゐた。「あしたからは、小政の姐御つて、山の手のお嬢さんたちにお辞儀をさせてやるから」刺青をそつと右手でいたはるやうに押さへるとせんは、全身に闘志がみなぎるのを感じていた。(三五頁)

とある。この引用は小政の刺青行為が、単なる自己防衛の本能による行為というよりも、刺青されている「肉体」を媒介として相手を強圧しようとする強者としてのアイデンティティを期待する心理に転化されている。「掟」という文脈と刺青という行為をむすびつけてみると、まず自己防衛というかたちを取りながらも、自己以外の相手に対する敵対的威嚇のための自己変身でもあった。刺青と肉体の関係をみてくると、「肉体」は、自己防衛という意識の下で鍛錬され、「掟」の強化のための手段として社会の中に再登場する。こうして戦後占領期の荒廃した社会空間がいやおうなく作り出した「肉体」は、ふたたび戦中の「肉体」の認識へと回帰する。

彼女たちの二つ目の掟というのは、彼女たちの「群」の中の掟である。これまで論じてきた「掟」が対外的な規律とすれば、こちらの「掟」は対内的な規律ということになる。

正当な代償をもらはずに、自分の肉体を相手にあたへる者が一人でもあれば、それは自分たちの協同生活体の破壊者

である。何故なら、そんな行為は自分たちのしやうばいを脅かすことになるからだ。 (二二頁)

彼女たちの中には、互いに価値観のズレ（人妻である町子と他の女たちとの価値観のズレ）があるにもかかわらず、互いを助け合うという掟に支えられて「土から生えた根強い団結と、闘争力を持つてゐる秘密の党」としての逞しい結束を誇っているのである。したがってその掟はパンパンの社会集団にあつては彼女たちなりの相互扶助という理念を実現させる規律として機能している。

パンパンの社会集団にあつては彼女たち個人の「肉体」は何よりも商品としてのみ用いることが許されているだけである。彼女たちは「肉体」の商品性を守るために互いに他者の「肉体」を監視／管理しなければならなかった。相互扶助と管理という、ある意味で正負の規律性をこの「掟」はもっていた。こうして小説のストーリーは彼女たち仲間の問題へと焦点を移動させていく。このようなストーリーの展開をふまえて次の二つの引用を考察してみよう。

この頃、なにかしらその団結がゆるんでいくやうな気配を、みんなは感じてゐるのだ。それは伊吹新太郎がきてから、いつのまにか、出来てしまつたある雰囲気、――彼女たち自身、はつきりそれとは感じてゐないが、伊吹を中心に眼には見えない、一つの雰囲気がつくられてきてゐることを、漠然と誰も感じてゐるからだ。このままでは、誰かが団結を破るにちがひない。団結が破れることは、自分たちの生存の問題に関係する。裏切りがどんなに恐ろしい制裁を受けるものかを、この際他にも知らせると一緒に、自分にも知らせる必要があつた。(三八―三九頁)

彼女たちの団結の世界が破られることに對する警戒感が働き始めている個所である。彼女たちが相互に監視／管理しているはずの日常の社会生活における肉体が、時として性の奔騰によつて逸脱することが起こる。そのことに對して警戒しなければならぬという事態は、掟がいくら生活する肉体と商売する肉体を区別しようとしても、性の奔騰が一挙にその区別をふみにじる。

伊吹のことを悪くいふ者は、そのことでもう、伊吹をめぐつて暗黙のうちに形つくられてゐる、眼に見えない生活秩

序から、自分で自分をのぞくことである。言葉に出して、お互ひにいはなくても、絶えず自分を主張してゐなければ、ちよつとしたきつかけで蹴落されてしまふ危険があるのだ。(中略) 町子のやり方に対する反抗は、表面では、みんなの共通の敵に対する協同の闘ひとしての形をとりながら、本当はさういふ内部の闘ひなのであつた。(四三頁)

性としての肉体の奔騰が女を集団の掟から逸脱させる。町子の掟破りによつて彼女たちがもつとも信じてきたはずの「掟」がかえつて自分たちを束縛する手段にもなりうるのだ。彼女たちは、彼女たちなりの理想の制度によつて、逆に自身がそこに縛られる奇妙な倒錯が起り始めているのである。しかし「掟」の論理が自己運動をするようになると、彼女たちは自分のための掟によつて内部の「協同生活者」と闘うことになつてしまう。つまり、共同体(全体)の安全と利益のために個人(部分)の自由は無視されても構わないという論理に捕らえられてしまう。今まで彼女たちの連帯と秩序を護つてきた「掟」は、疑う余地のない大きな矛盾をかかえているということが次第に露呈する。

三 「パンパン」の誕生

「肉体の門」が当時の読者たちを強くとらえた背景には、前年の昭和二十一年(一九四六年)四月にNHKの企画により全国に放送された街頭録音「ガード下の女たち」¹⁰⁾、つまり「パンパンガール」の声が国民に訴えかけたという背景があつたからかもしれない。「肉体の門」は、あたかもその女性たちの声がそのまま小説化されたかのように、読者には思えたのではなからうか。言いかえれば、当時の人々は「肉体の門」という小説よりも以前に「パンパン」の切実な声を聞いていたのである。この事実が「肉体の門」を読むうえで大きな意味をもっていると考えられる。

敗戦直後、日本政府の内務省警保局は全七項目にわたる「進駐後の心構え」という綱領を発表、その中の四項目から七項目にわたつて進駐軍に対する婦女子に注意を呼びかけている。そして八月一八日、「外国駐屯軍慰安施設等整備要領」という秘密通達が内務省警保局から各県の警察署長宛に発せられる。特殊慰安施設協会、いわゆるR・A・A (Recreation and Amusement Association) の設立が計画されていた。そのR・A・Aの設立「声明書」をみるなら、「昭和のお吉」幾千人かの人柱の上に、狂瀾を阻む防波堤を築き、民族の純血を百年の彼方に護持培養すると共に、戦後社会秩序の根本に、

見えざる地下の柱たらんとす^①と記載されている。八月二十六日、政府から三千三百万円の資金援助を含めて総出資金一億円で花柳界業者代表により株式会社R・A・A協会が結成される。その後、「厳肅たる宣誓式」が行われ、「新日本再建の発足と全日本女性の純血を護るための礎石事業たることを自覚し、滅私奉公の決意を固める」ことから一挙に国策による公然売春事業が実施された。

R・A・Aの運営が始まってから、銀座通りには「新日本女性に告ぐ！ 戦後処理の国家的緊急施設の一端として、駐屯軍慰安の大事業に参加する新日本女性の率先協力を求む。―女事務員募集、年齢18歳以上25歳迄。宿舎・被服・食料全部当方支給」というR・A・A業者たちの看板広告が登場することになる。さらに九月三日、四日付『毎日新聞』にも「急告 特別女子従業員募集 衣食住及高給支給 前借二モ応ズ 地方ヨリノ応募者ニハ 旅費ヲ支給ス 東京都京橋区銀座7ノ1 特殊慰安施設協会 電話銀座(9119) 2282番」という女性募集広告が載せられる。結局、日本全体の女性の貞操を守るために、少数の彼女たちがふたたび利用されることになったのである。占領史研究家福島鑄郎によると、「R・A・Aは性病蔓延」という報告結果が出され、一九四六年三月一日、GHQの立ち入り禁止(R・A・A全施設Off limits)指令が示達され、その後施設は閉鎖された。その間約七万人の女性がR・A・A施設に入ってきたということである。つまりその結果、彼女らの居場所はなくなり、仕事を求めて大塚街上に表れるようになった。その彼女たちがいわゆる「パンパン」と呼ばれる売春婦の誕生である。ちなみに、このような事実は一九四六年、大衆の間で「オフリミット」が流行語となつて広がったということから、多くの人々に知られていたと考えられる。

このようなことから敗戦直後の解放ムードというのは、結局のところ「女」の性の犠牲のうえに生まれた異常な精神状態だったと見られる。翻つてこの問題を考えると、性の問題は当然GHQだけの問題ではなく、当時の日本人々にも同じくかわる問題で、GHQ側が性の自由をさほど拘束しなかったのは、一面このようなR・A・A利用の問題と連動してGHQ自らの自己矛盾からの脱出とも考えられる。しかも「性の自由」は占領側が被占領側の男性に与えることができる最大のプレゼントという印象を与える最も手軽な政策にもなるはずで、これら二つの問題を同時に素早く解消できる絶好の政策であつただろう。

このような意味で「パンパン」は、直接間接をとわず日本政府とGHQの合作品として現れた存在である。ということ、「パンパン」はけつして戦時中の欲望発散の抑制、それも聖戦の立派な遂行手段という美名にあざむかれて長らく抑

圧しつづけられた「肉体」が、戦後になって解放されたというものではないということである。その意味からすると、「肉体の門」は単なる戦後の価値転倒を主題とする小説とは言いきれないということである。

あらためてパンパンたちの「掟」とその「誕生」の問題をまとめてみよう。これら二つの問題は、ともに特定の共同体あるいはある団体を構成する全員の安全と保護という名分を共通にしていた。しかしその裏面には、パンパンたち個々に犠牲が強いられる仕組みになっている。個人よりも全体に絶対的価値が置かれる論理、つまり戦中の総力戦体制下に求められたファシズムの論理がそのまま受けつがれるかたちで実現していたのである。

では、なぜ「肉体の門」は「民主化」のスローガンであふれていたはずの占領期に総力戦体制下の論理（＝ファシズム）でつらぬかれていくのだろうか。その疑問に答えるためには、テキスト「肉体の門」と同時代のコンテキストとを合わせて精査する方法を取り入れることにする。

四 占領とファシズム

「肉体の門」の中で占領軍（主にアメリカ軍）をはっきりと表象することは徹底的に排除されている。占領期、しかもパンパンが小説の主な材料でありながら、それと密接に結びついていた占領軍が前景化されていないというのは、当時の検閲の問題を意識していた結果というほかには考えられまい。実際、田村泰次郎の作品「故国へ」（『小説』一九四六、一）と「美しい眼」（『故郷』一九四七、三）は、それらの作品が〈Propaganda〉と〈Resentment of Allied the Forces〉であるという理由でそれぞれ当該箇所削除の処分を受けていた。このような当時の検閲状況は「民主主義」あるいは「民主化」のスローガンからみえるなら当然矛盾することであり、一種の「掟」的役割を果たしていたとも考えられる。そのような状況を考えてみると、ある面において総力戦体制下の論理がそのまま占領期支配イデオロギーに切り替えられて実現されていたとも考えられる。当然、作家田村泰次郎を含む戦後知識人はそのことを十分に認識していたと推測できる。これに関しては、実際同時代の言説を検討してみると一目瞭然である。

まず、一九四八年『復活』に収録された小田切秀雄の「ファシズムに道を開く文学」という評論を見てみよう。以下の言説はGHQにより削除された部分の一節である。

最近のファシズムは、さきに見たような露骨な諸形態をとつて進行もしているが、これと相まつて、たとえば「民主化同盟」の活動に最もよく象徴されているようにほかならぬ「民主化」の名によつて推進させられているところに新しい特質がある。わたしたちのうちに残っている古いものやまた民衆のおくれた部分につけこんで、その数の多さの上に「民主的」多数決をふりかざすやり方がファシスト・社会ファシストによつて組織的に展開されはじめているのだ。―ファシズムがほかならぬ「民主化」の名によつて強行されている現実、文学の世界にも現在ではまだ露骨なファシストそのものの活動を必ずしもきわだたせていない^⑩。

結論的にいえば、この言説は非政治主義的な「近代的自我の確立」を主張する「モダニズム」を警戒するとともに、また一方で「ヒューマニズムの端緒」から「反理性と衝動主義」へと変化する「肉体主義」がふたたびファシズム文学へと傾斜するのを警告する口調で語られている。しかし本論で注目すべきところはそこではなく、むしろ戦後ファシズムの制度が「民主化」の名によつて推進され、また「民主主義」の重要な原理とされている「多数決」を取り入れながら展開されているという彼の認識である。小田切秀雄は戦後の「ファシズム」が「民主主義」の原理と結合する形態で進化していることを見抜いていた。彼の言説からいえることは、「ファシズム」と「民主主義」はけつして相容れない理念ではなかったということである。だからこそ、この言説はGHQにより削除処分を受けざるを得なかったのだらう。

しかし、このような戦後知識人の危惧は占領期の検閲によつて抑えられていたせい、サンフランシスコ講和条約が発行される一九五二年以降になつてやつと一斉にその言説が発表されるようになった。一九五二年、岩波書店刊行の『思想』九月号はアメリカの巨大資本主義の構造がファシショ化されていると批判する「ファシズムとアメリカ」を載せている^⑪。そして、同年一月ではファシズムをテーマとする「特集 ファシズム」を企画、丸山真男を含む同時代の知識人のファシズムに関する言説を取り上げている。その「特集」は、「現在におけるファシズムの危険の所在と動きを明らかにする」ためであるという企画意図の下で知識人に執筆を依頼したものである。もちろんこの時期の言説は、占領期を過ぎた日本国内の事情や国際情勢の変化の上に生まれてきたはずだが、知識人の戦後ファシズムに関する懸念は以前にもまして増大していたようである。その言説の中で一つ例を挙げてみよう。

さらにこの戦後のファシズムの著しい特徴は、前述のように戦前のそれと異なつて「民主主義」、「平和擁護」のスローガンの下になされているという点である。すなわち戦前の「民族主義」の代わりに、ここでは「アメリカニズム」、つまり「世界主義」^{コスモポリタニズム}「民主主義」の擁護の旗印の下に行われている。(中略) 厳格な国家統制と労働組合官僚の助けをかりて事実上ファシシヨ的統制の機能を果たし、またデマゴギーの組織においても「言論の自由」の名の下に新聞、ラジオ、学校制度その他の報道・教育機関を完全にその統制下におくことによつて、十分目的を果たしている。ここに戦後のファシシヨ化の第二の特色がある。

この引用は、勝部元の「ファシズムの本質とその展開」の中の一節である。戦後のファシズムは民主主義のスローガンの下で行われていることにその特徴があると指摘している。一見、上述した小田切秀雄の言説とほぼ同様の点を問題化していることがわかる。しかも、アメリカは「民主主義」を標榜しながらも「言論の自由」を統制するような矛盾を孕んでいると批判し、そしてそれが戦後ファシズムのもう一つの特色であると記している。まさにこれは、占領期日本が抱えていた状況と矛盾そのものを連想させる言説にもなるだろう。

さらにもう一つ例をあげて検討してみよう。敗戦直後一九四六年、『世界』五月号に発表した「超国家主義の論理と心算」をはじめとして戦前戦後のファシズムの問題に取り組んできた丸山真男は、一九五三年『福音と世界』四号に「ファシズムの現代的状況」という戦後ファシズムに関する研究論文を出していた。そこでは次のような指摘がなされている。¹⁵

第二次世界大戦における枢軸の敗北によつて反ファシズム勢力は戦前と比較にならないほど高まつたので、もはや戦後のファシズムはファシズムの看板では出現できず、却つて民主主義とか自由とかの標語を揚げざるをえないことになりました。そこできわめて事態は複雑になつて来て、民主的自由や基本的人権の制限や蹂躪がまさに自由とデモクラシーを守るという名の下に大つぱらに行われるようとしているのが現在の事態です。

まず、戦後ファシズムの様相は民主的方法を取り入れながら展開されていると論じていたあと、つづけて、

ただ反革命のための強制的同質化というファシズムの機能が戦後自由民主主義の仮面の下に現われるときに、どういう形をとるかということ、自由民主主義の伝統が最も強い―従つて思想的伝統からいえばファシズムの思想とは最も遠いはずのアメリカについて検討したまでのことです。つまりアメリカのように本来の自由主義の原則が長く根をおろしていたところでさえ、自由を守るために自由を制限するという考え方は、現在の客観情勢の下ではズルズルとファシズム的な同質化の論理に転化する危険があるとするならば、わが日本のような、自由の伝統ところか、人権や自由の抑圧の伝統をもっている国においては、右のようなもつともらしい考えの危険性がどれほど大きいかは言わずとも明らかであると思います。

と語っている。戦後ファシズムは、「自由と人権を守る」という民主主義の名の下で文化伝統の異なる他国に強制的同質化を求めていると強調している。自由民主主義の伝統が最も強いアメリカ国内にさえ同様な現象が現れていると記し、戦後ファシズムに対する危険性を呼びかけている。

以上の戦争直後あるいは五〇年代の知識人の言説群からも確認できるように、総力戦体制下のファシズムの論理は日本の敗戦とともに粉碎されたわけではなく、「民主化」という新しい理念の下で根を張っていたと警戒されており、しかも戦後ファシズムの背後にアメリカが行う矛盾が働いていると糾弾していることを見逃してはなるまい。

このような言説群は当然作家田村泰次郎をも巻き込んでいたとみてよからう。彼もまた戦後ファシズムの同時代的正体をすでに察知していたと考えられる。とすると、「肉体の門」における「掟」の論理の矛盾は、占領期支配イデオロギ―が孕んでいる矛盾を具体化して見せる方法にもなりえていたと思われる。

では、あらためて「肉体の門」がこの問題をどのように認識していたのかを考察してみよう。

「肉体の門」には、戦時中の総力戦体制下で行われ、国民統制の末端組織として活躍した「隣組」のなごりがパンパンたちの間にも相変わらず働きつづけている様子が読みとれる。

菊間町子が仲間の掟を破つて、ある中年者と、毎日のやうに烏森の簡易ホテルで逢つてゐるくせに、金をとらないと

いふことを聞きだしてきたのは、花江と美乃だった。(中略) この二人はいつも組んで、歩いてゐた。二人分の嗅覚を一つにして、街のいろんなことをかきだしてくるのに妙を得てゐた。二人は仲間のアンテナであり、触手でもあつた。(三八頁)

総力戦体制下の「隣組」は、その地域での防空・防火、防諜活動、警報伝達、灯火管制などの役割を積極的に果たしていた近隣組織であるが、不参加者または反対者を「非国民」という言葉で抑圧した例が数多く知られている。引用での花江と美乃の役割というのは、まさに「隣組」の行つたことを連想させる場面であろう。そしてその後、二人の密告まがいの情報により集団の掟を破つた菊間町子に対する制裁がはじまる。つまり戦時中の総力戦体制下の論理が残像としてそのまま描かれているのである。これは「肉体の門」が語る戦前／戦後の連続の問題にもつながる個所でもある。

五 伊吹新太郎の批判と思想

「肉体の門」は女性娼婦、パンパンたちの話であるが、ただ一人、男性人物が彼女たちの中に登場する。伊吹新太郎がそれである。田村泰次郎は、一九四八年『肉体の門』前後」でこの伊吹新太郎について次のように語っている。

私はかういふどぎついパンパンといふ存在に、どぎついけれども、敗戦日本の混乱した現実のなかから生き抜かうとするがむしやらな生命力みたいなものを感じた。その若者の生命力を戦地から帰つてきた伊吹新太郎に象徴させて、この女たちとその男の組合せを現代の日本民族のなにか象徴みたいなものにしようと思つた。

ここで注目すべき点は、占領期の男女ーパンパンと伊吹新太郎ーを通して当時の日本社会を「象徴」するということにある。特に伊吹新太郎の人物造形や役割はパンパンたちとは対照的であり、彼女たちの集団にとつて外部にいるということが重要である。集団の外部の個という異質性、あるいはその距離が彼を集団の批判者という位置におく。

伊吹新太郎は、戦中は「北支」、つまり中国の北部の戦場で国家の意志を遂行していた人物だが、敗戦後、日本に帰郷

した復員兵である。しかし、敗戦の日本には伊吹新太郎の居場所は見当たらず、戦後のアウトサイダー的存在になっていた。つまり国家が強制した総力戦体制下の論理による一連の残酷なプロセスをいやというほど見せつけられてきた人物であると考えられる。このような人物を通してパンパンという特殊な女性集団を見つめさせるというこの作品の構造はどのような意味をもつのだろうか。

まず、この疑問に結論づけるなら、占領期支配イデオロギーへの批判と「肉体の意味」を再考することであろう。これを具体的に考察してみよう。

第一に、当時の日本社会を〈外部〉から見つめさせるということ、特に前述してきたとおり、「肉体の門」のパンパンたちの集団の「掟」が総力戦体制下のファシズムの論理を引き継いでいるならば、それを〈外部〉から見つめる人物を登場させたということには、おそらく彼を通して作家田村泰次郎の批判精神をみるべきではなからうか。実際「肉体の門」の中で伊吹新太郎はどのように描かれ、何を見つめているのかを追究して行こう。

パンパンたちと過ごす伊吹新太郎にとって彼女たちの様態は次のように捉えられている。

自分の身体の危険に対しては、彼女たちが舌をまくほど敏感なところがあつたが、これは戦地から持つて帰つた習性で、動物の本能だつたが、彼女たちの生き方はそれとちがつて、なにかふざけて、面白がつてゐるやうなところが、癪にさはつた。伊吹新太郎が、こんなに彼女たちの生き方に憎悪をいだきながら、この地下室から出て仲間のところへ帰つて行かないのは、傷がまだ十分に癒らないためだつた。(三七—三八頁)

伊吹新太郎は、彼女たちパンパンの「生き方」に強い憎悪を感じている。つまり彼女たちのその「生き方」、「掟」に縛られている生活ぶりに違和感を覚えているのである。では、伊吹新太郎の「掟」に関する姿勢を確認してみよう。

「おい、馬鹿だなあ、お前たち、もうそんなつまらないことはよして、いい加減に放してやれよ」横合ひから、伊吹がいった。彼はこの人間を馬鹿にしたやうな、性の悪いふざけた小娘どものいたづらに、また例によつて、本能的な反撥を覚え、さういはずにゐられなかつた。(四一頁)

菊間町子の掟破りに対するパンパンたちの制裁の場面であるが、それは伊吹新太郎によって止められることになるという個所である。ここで注意すべきのは、伊吹新太郎が憎悪あるいは反撥を覚える対象は実は彼女たちパンパンの生體ではなく、彼女たちを支えている「掟」の方であるという点だ。つまり、彼女たちは自分たちの共同体を外から防衛するため創り出した制度、そしてそれに従って行動していることが、伊吹新太郎にはどうも「性の悪いふざけた小娘どものいたづら」にしか見えないのである。「掟」はその必然の論理展開として、外からの防衛という目的のために、内部の逸脱者に暴力をふるって抑圧するか、最悪の場合、そのような者を排除するか抹殺するかしなければならなくなる。それこそがファシズムの論理にほかならない。伊吹新太郎はその論理をいやというほど味わわせられてきた。したがって、それがいまくり返されることは「いだづら」としか見えないのである。ここに「掟」の持つ性格というものを真つ正面から否定している伊吹新太郎の姿勢がうかがえる。

この姿勢は菊間町子のまなざしからも読みとれる。

意識的に町子におもねるのではなかったが、町子の官能のみづみづしきを見ると、ふだんマヤたちを感じてゐる、肉体の意味さへ知りもしなくせ、一人前面してゐる彼女たちへの小面憎さが、ひとりでおもてに出るのだ。伊吹の口調に、彼女たちへの根深い憎悪が籠もつてゐるのを感じて、町子は眼をみはるやうな顔になつた。(四二頁)

伊吹新太郎がなぜ憎悪するのかという理由が菊間町子の観点からも捉えられているが、その憎悪の真の対象というなら「肉体の意味」を知らないまま生活する彼女たちの「生き方」、そして「肉体の意味」を知らせないように彼女たちを取り囲んでいる「掟」の存在であることが次第に明らかになつてくる。つまり伊吹新太郎のまなざしには、「掟」にほのめかされている彼女たち共同体への反撥と批判が刻み込まれている。そして彼の背後に作家田村泰次郎の批判精神を読みとるべきであろう。

第二に、伊吹新太郎像には、パンパンたちにとって商品として制限され「しやうばい」の手段としてのみ用いられていた「肉体」の新たな意味を自覚させる役目が託されている。その方法として物語は、伊吹新太郎とパンパンの一人、ボル

ネオ・マヤが肉体関係を持つてしまう場面へと展開していく。

マヤの肉体の喜びのうめきは、伊吹の憎悪の火に油をそそぐのだ。ボルネオ・マヤは完全な一匹の白い獣であった。肉体の哀しいまでのあやしさ、たのしさ、くるしさに、のた打ちまはり、うめき、呻えた。腰のあたりが、蟬のやうに燃えて、溶けて、流れるのを感じた。生まれてはじめての充実した感覚、いや、マヤはいま自分をはじめて、この世に誕生するのを感じた。(五二頁)

この行為は、ボルネオ・マヤにとって生まれ変わるほどの充実した感覚を初めて感じさせる出来事であった。つまり、「掟」という総力戦体制下のファシズムの論理を破るとともにそこに束縛されていたはずの「肉体」が解放されていく行為になるのである。

田村泰次郎は単行本『肉体の門』(一九四七、風雪社)の「あとがき」に次のように書いている。

私たちの頭のなかにある既成の人間観や、もつたいぶつた倫理学は、かへつて本当の人間把握の邪魔になるばかりだ。ところが、さういふ既成の権威は尚、外部ばかりでなく、その瞬間から私たちの内部にも、勢力を張つてゐるのだ。(中略) 自分の頭が信用出来ないならば、私たちはこの激動の現実は無心に肉体を没入させ、肉体で考へるより仕方がないではないか。

田村泰次郎の信用すべき価値の範疇からは、既成の人間観や倫理観があつさりと排除されてしまう。その代わりを「肉体」の自己運動に求めている。田村泰次郎は究極の信頼を「肉体」にゆだねている。そのゆだねられている「肉体」が、「肉体の門」のなかでは伊吹新太郎によって形象化されていく。

つまり伊吹新太郎という人物は、「肉体の意味」を彼女に自覚させるかたちで、パンパンたちの世界を覆っている論理が実は戦前・戦中と変わらないファシズムの論理だったということを知らせていたと考えられる。そういう意味で、伊吹新太郎は戦後占領期の支配イデオロギーにみられる矛盾を暗に鋭く批判していた人物であり、田村泰次郎の「肉体の意味」

を具現化していく人物でもある。そして彼の背後に作家田村泰次郎の批判と思想があつたといふことができる。

六 おわりに

田村泰次郎は「肉体の門」が発表された同年、一九四七年『群像』五月号に「肉体が人間である」というエッセーを発表している。そこで田村泰次郎は次のように主張している。

私は民族を戦争の惨禍から救ふことになんの力の足しにもならなかつたやうな「思想」は、いまではちつとも信用してゐない。信用してゐないどころか、そんないい加減な上すべりの、おつちよこちよいの「思想」には、腹立たしさと憎しみさへ覚えてゐる。(中略) 私は思想といふものを、自分の肉体だと考へてゐる。自分の肉体そのものの以外に、どこにも思想といふものはないと思つてゐる。

田村泰次郎は戦時中の日本人が信奉してきた「思想」に強い不信感を語りながら、「肉体」こそが信用すべき思想を保つていと述べている。そしてその「肉体」が具現化されている作品の一つに「肉体の門」を挙げている。ということは、「肉体の門」には田村泰次郎の「肉体」に託した思想が内在していることになる。だからこそ「肉体の門」の結末では、集団の「掟」によってリンチを受けるボルネオ・マヤの姿が「十字架の上の予言者」として表わされたのである。その意味で、田村泰次郎の「肉体」はただ「精神」に対峙する概念ではあるまい。田村泰次郎はあくまでも信するべき唯一の思想として「肉体」を押し立てている。そのうえ、「肉体の門」とは「占領」がもたらす同時代の支配イデオロギーの矛盾を「パンパン」という女性集団の「肉体」を媒介にして見事に暴き出してみせる。つまり「肉体の門」は、作家田村泰次郎の「思想」が戦前・戦中の思想、そして占領期支配イデオロギーとせめぎ合う現場である。

本論の引用は『田村泰次郎選集』三巻（日本図書センター、二〇〇五）によるものである。

【注】

- (1) 『丸山真男集』第四巻、岩波書店、一九九五（初出）『展覧』一九四九、一〇号）
- (2) 鹿野政直（健康観にみる近代）朝日新聞社、二〇〇二）は、第二次世界大戦を境としてその先を「体力の時代」、その後を「肉体の時代」、つづいて「体調の時代」というように区分している。
- (3) 『武田泰淳全集』第十三巻、筑摩書房、一九七二、二九二頁
- (4) 神谷忠孝「抑圧から解放へ」『講座昭和文学史 第三巻 抑圧と解放』有精堂、一九八八、五一六頁
- (5) 前田愛「都市空間のなかの文学」筑摩書房、一九九二、五三〇―五三二頁
- (6) 大村彦次郎「田村泰次郎と「肉体の門」」『ちくま』一九九八、六号
- (7) 青野季吉「創作合評会（2）「肉体の門」解剖」『群像』一九四七、五月号、五九頁（国会図書館所蔵『プランゲ文庫マイクロフィッシュ』）
- (8) 川嶋至「田村泰次郎「肉体の門」」『国文学解釈と鑑賞』一九七〇、二月号
- (9) 山本幸正「肉体」と「孤独」―肉体文学と坂口安吾―『文芸と批評』二〇〇一、九巻二二号
- (10) 大島幸夫「人間記録 戦後民衆史」毎日新聞社、一九七六、二二五頁
- (11) 南博「戦後資料 文化」日本評論社、一九七三
- (12) 福島靖郎「戦後雑誌の周辺」筑摩書房、一九八七、二六二頁
- (13) 稲垣吉彦「流行語の昭和史」読売新聞社、一九八九、三〇二頁
- (14) 横手一彦「被占領下の文学に関する基礎研究 資料編」武蔵野書房、一九九五
- (15) 本論における引用は国会図書館所蔵『プランゲ文庫マイクロフィッシュ』資料による。
- (16) 論者はアメリカのマルクス主義理論家、ポール・M・スウィーージーである。
- (17) 一九五〇年代アメリカのマッカーシズムによる赤狩りは、日本国内にもいわゆるレッド・パージとして影響される。これによって多くの共産主義者が公職や企業から解雇、追放され、日本の労働運動は大きな打撃を受けた。そして一九五〇年六月に朝鮮戦争が勃発してふたたびアメリカの戦争参加が行われる。
- (18) 本論における引用は『丸山真男 戦中と戦後の間』（みすず書房、一九七六）五四一頁、五四八頁による。